

No 1 どの学級にもいる特別な教育的ニーズのある子どもたち

宇都宮市教育センターで平成17年1月に行った「特別な教育的ニーズのある児童生徒の調査」では、全体の約5.1%（小学校4.7%，中学校6.3%）の児童生徒が特別な支援を必要としており、国のLD，ADHD，高機能自閉症児等に関する調査（6.2%）と近い数値になっています。40人の学級では、2～3人いてもおかしくないという状況です。

診断名のあるなしに関わらず、「落ち着かず離席が目立つ」「一斉の指示だけでは授業の参加が難しい」「友達とのトラブルが絶えない」など、気になる子どもの多くは、これまで本人の努力不足・しつけが悪いなどと誤解されたり、適切な指導が受けられずに二次的な障害（反抗的な言動，不登校，非行）などに陥りがちでした。

今、これらの子どもたちへの支援について、学校・社会全体で考えていくことが望まれています。

軽度発達障害は増えている？

「軽度発達障害のある子は、昔もいたろうに、そういう話は聞いたことがなかった。増えているのだろうか？」という疑問がよく出されます。

このことについて、筑波大学の宮本信也医師は、「診断基準などが整備され、診断しやすくなったことも影響しているでしょう。実数はあまり変わっていないけれども、家庭や社会環境の変化等により、問題としてあげられる子どもが増え、そうした子どもが診断されやすくなった、と考えられます。」と答えられています。

フーッとため息をつく時にでも
豆だよりを読んで頂けたら・・・

特別支援教育豆だよりは、時々思い出して頂ける程度に発行していく予定です。

別紙に、「こんな内容を発行します」ということで一覧表をのせましたので、参考にしてください、指導等にご活用ください。



発達障害のある子や、そのような特徴をもつ子は、その特徴があるがゆえに、自分ではうまくやりたいと思ってもうまくゆかず、生活の中で、さまざまなストレスにぶつかり悩んだり、つらい経験をしています。

私たちは、発達障害のある子だけに努力を求めているのでしょうか？

目の不自由な人に、自分の努力で見えるようにしろとは誰も要求しないように、私たちも、どのようなことをすれば発達障害のある子もうまくゆくのかを工夫することが大事なのではないでしょうか。

目指すところは、じっとしていることではなく、子どもたちが健康なこころを成長させていくことなのです。

No 1の参考図書 「十人十色なカエルの子 特別なやり方が必要な子どもたちの理解のために」 落合みどり著 宮本信也 医学解説（東京書籍）